



## 平成8年度('96年度)の活動方針

辻 康子



会員お一人お一人が考えてくだされば良いのです。

平成8年度は、時間の許す限り卓話を取り入れていく方針です。弁護士、芸術家、大学教授など各界でご活躍の講師をお迎えして、成年後見法、セクシャル・ハラスメント、女性の自立、環境芸術の話など多方面にわたり興味深いお話を伺う計画です。会員の皆様に例会を楽しみにして頂けましたら、こんなに嬉しいことはないのです。平成8年5月例会(総会)で、クラブ創立以来初めて授与された皆勤賞、精勤賞(1回欠席、いずれも1年間)は、出席率向上の切なる願いを込めて設けたものです。会員の方々には忙しい本業の合間をぬっての活動参加ゆえに、少しでも中身の濃い活動、充実した楽しい交わりが持てますようにと役員一同心掛けております。何卒本年度も皆様のご協力、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い致します。

平成7年6月に大阪IIゾンタクラブ第2次執行部がスタートして以来丸1年が経ち、平成8年6月には執行部2年任期の後半を歩み出しました。ゾンタの目標である女性の地位向上と奉仕活動に添うために、と昨年、わがクラブが掲げた目標「委員会活動の活性化」は各委員会によって活発に実践されました。平成7年10月例会の「与謝野晶子みだれ髪ツアー」や、平成8年4月例会の老人ホーム「百丈山合掌会」でのお花見会参加は、いつもの例会場を飛び出でての新鮮な経験でした。殊に老人ホーム慰問は、奉仕活動を志す会員一人一人が先ず見ることから始めてください、とホーム施設長をなさっている川嶋会員のご親切な提案によるものでした。私達がお邪魔しご迷惑をおかけしては申し訳ないという気持ちから、主婦中心のアマチュアグループ、アンサンブル・ジュノーによるマンドリン演奏をプレゼントし、喜んで頂けたことは幸せなことでした。

奉仕活動はそれぞれの時・場所など諸事情により異なりますが、自分の立場をわきまえ、常に謙虚で相手を想いやる心を忘れず、決して一人よがりにならないよう慎重にかつ確実に進められなければなりません。平成8年3月例会で講演して頂いた黒住格先生は、ネパールの眼科治療に25年間もご奉仕されているとの事でしたが、ただ”与える”のみの援助でなく、”育てる”援助を続けていらっしゃる氏のお姿に感動し、援助はそうあるべきだと深く感銘を受けたことを覚えています。まだ若いクラブの私達は試行錯誤しながらも一歩一歩歩いていくうちに、私達のクラブらしい奉仕活動が見つかっていくのではないのでしょうか。”クラブが何をしてくれるか”ではなく、”自分はクラブに何ができるか”を



クラブ創立以来早3年余りが過ぎました。私達大阪Ⅱゾンタクラブは、第1期（1993～95年西会長執行部）以来、ネパール眼科治療援助（ネパールアイキャンプ）、フォスター・プランに対してそれぞれ継続して国際奉仕活動を行ってきました。そのうちの一つ、フォスター・プランへの参加活動の一端を、国際委員会の委員会報告として紹介して頂きます。

## 小さな国際交流

### スリランカの子供たち

国際奉仕委員長

西村 博子



現在私達クラブは、フォスター・プランでスリランカの二人の子供たちと交流をしています。フォスター・プランとは、国連に公認・登録された特定の宗教、政治に関係のない民間で非営利の国際援助機関（NGO）のひとつです。日本では、1984年にこの活動が開始され、1986年に外務省の財団法人に認可されました。「フォスター」とは「育てる・助成奨励する」という意味だそうです。私達はフォスター・ペアレントとして、1994年9月よりこの活動を始めました。発展途上国に住む子供（フォスター・チャイルド）と文通などで心の交流をもち、経済的にそのフォスター・チャイルドの住む地域の自立を支援していくこととなります。以前、朝日新聞にこのフォスター・プランによる日本の里親が、スリランカを訪問し、フォスター・チャイルドの子供達と交流を深められている記事が掲載されていました。里親制度は国内でもあり、家庭養護促進協会などがそうした活動を展開しています。私達のフォスター・チャイルドは、フォスター・プランが行っている地域を代表する子供の親善大使たちです。法律的な養子縁組ではありませんが、子供たちは、現地で家族を通し、文通を通して、私達ペアレントと交流をします。一人のフォスター・チャイルドとその地域を援助する金額は1カ月5000円で、この援助金は、その子供たちの住む地域で行われる様々なプロジェクトに使われていきます。私達も1年に2回、6カ月分ずつを東京の日本フォスター・プラン協会に送金しています。

さて、私達のフォスター・チャイルドの住む国スリランカは、ご存知のように、インド洋にうかが島国で、地理的にも東西交通の要衝にあり、船舶の重要な寄港地です。多民族国家で、大きく三つのコミュニティすなわちシンハラ、タミル、イスラムに分かれ、言語はシンハラ語、タミル語です。そして遠い昔歴史の時間に覚えた”紅茶”の名産地としてはあまりにも有名であり、今もそのおいしい紅茶は、私達の食卓を豊かにしてくれます。そんな国を想いながら、二人のフォスター・チャイルドをご紹介します。

フォスター・プランニュースによりますと、現地の人々が考える理想的な交流の一つとして

①ペアレントの手紙がほしい

②ペアレントの写真がほしい

③電話やカセットテープで、声が聞きたい

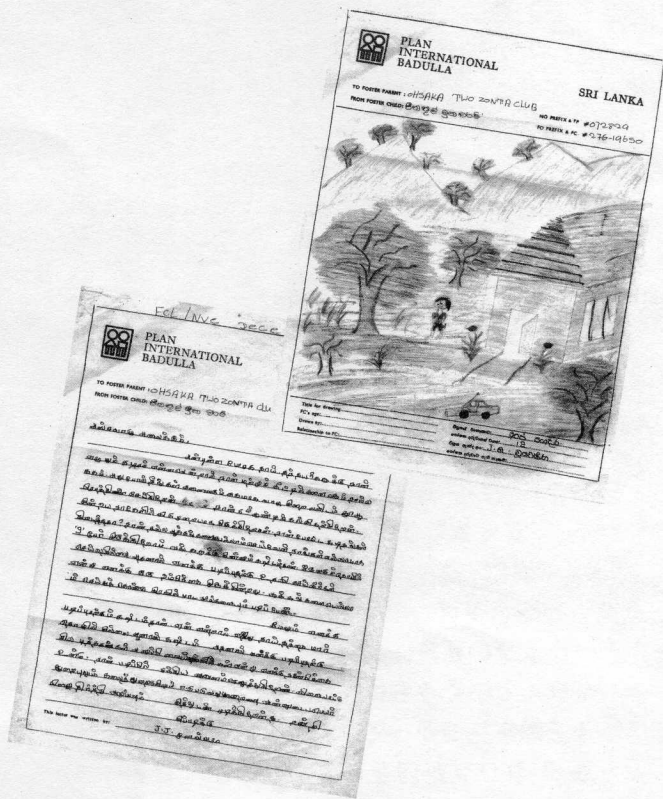
ビデオで姿がみたい

などがあげられています。

子供たちからの手紙に書かれていますように、私達の国、そして私達の日常生活を伝えながら互いに理解し、心の交流を深めていくことの大切さを感じます。

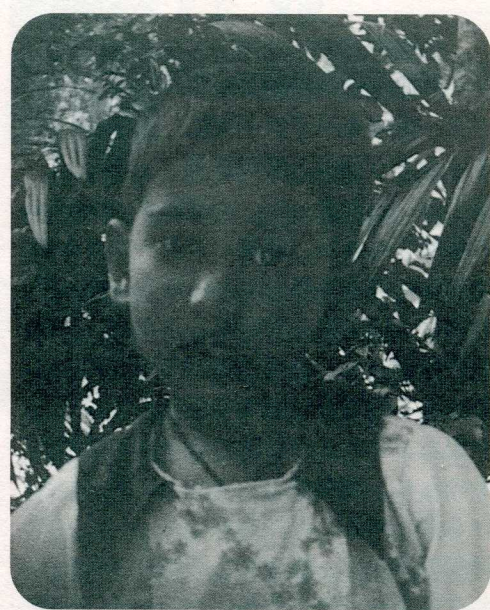
今秋は彼女たちのお誕生日にむけてカードを送りましょう。翻訳されて現地に届くのは、とても時間がかかりますが、またいつか彼女たちの成長記録が送られてくるのが楽しみです。そして、将来さらに良い奉仕ができるようにスリランカの国を訪問する機会も作っていきたいですね。

（チャイルドからの手紙や成長記録、またフォスタープランニュースは、例会時にも回覧しています。）



フォスター・チャイルドからの絵と手紙





**NILMINI SUGANDHIKA R. D.**  
ニルミニ スガンディカ

1990年11月15日生 5才(幼稚園児)

家族は両親と2才下の妹がいます。父親は農夫。母親は専業主婦で、農園を手伝っています。

全員とても健康です。

日常語はシンハラ語。

一家は瓦葺きの屋根の5部屋ある持家で、煮炊きの燃料は薪を使い、夜は灯油ランプ、125mも離れた井戸から水を汲み生活をしています。

主食はお米です。お茶は必需品でお砂糖をいれて飲みます。

この一家はフォスター・プランの住居プロジェクトに参加し、生活改善に一生懸命取り組んでいます。

このコミュニティには病院・学校があり、政府派遣の保健婦がいます。

1995年12月3日

親愛なるフォスター・ペアレント様

みなさまお元気ですか。フォスター・チャイルドは今、幼稚園に通っています。楽しく勉強しています。歌ったり、書いたり、面白くやっています。

フォスター・チャイルドの家族はペアレント様のこと、お国のことを知りたがっています。この村は美しい山と茶畑に囲まれています。素晴らしい滝もあります。このあたりの人はほとんど茶畑に働きに行きます。

では、今日はここまで。また、お手紙を書きます。神のお恵みがありますように。

心をこめて

コミュニティボランティア、プリヤンサ



**JINATHUL MUNAWWARA**  
ジーナスル ムナウワラ

1983年12月16日生 12才

現在6年生で好きな科目はタミール語です。学校の成績は良く、自分で手紙を書きます。算数と朗読の才能があります。家族は両親と兄弟姉妹で、10人でしたが、兄が交通事故に会い亡くなりました。父はセイロン国有鉄道で働いていましたが、今は年金生活で貧しい生活です。3人が学校に通っています。一家の屋根はトタン板ですが、自分の土地に家があり、5部屋です。4月に新年を、5月にウエサク祭を祝います。また2月4日の独立記念日は、すべてのコミュニティで祝います。一家はグループ活動に興味を示し、村の向上のために話し合い行動をとっています。

フォスター・プランによる援助で、村では家屋や道路・給水のプロジェクトが実施され、農機具や学用品の支給もされ、病院もできました。

子供たちのプログラムも盛んです。

1995年11月8日

親愛なるフォスター・ペアレント様

私達は元気です。アッラーの神のお恵みが皆様にありますように。私は5年生で、勉強しています。今は、学校はお休みです。皆様に私の手紙は、届きましたか？ 私は元気に暮らしています。わが家は9人家族です。私達はいろいろな困難に直面しています。家族の誰も仕事についていないのです。皆様が、私の教育のために援助して下さることを願っています。夜は、宿題や授業の勉強をしています。家族の誰も仕事についていないので、私はたくさんの困難に直面しています。私は、勉強をしたり、スポーツをするのが好きです。

さて、ここで、手紙をおわります。皆様からの手紙を待っています。お元気で。

あなたのフォスター・チャイルドより





美しい5月の朝、伊丹空港よりJALにて一路札幌へ飛ぶ。私にとっては、はじめての北海道。ふだん仕事に追われて貧しい生活を繰り返している私には、エリアミーティングとはいえ、大阪をはるか離れて北海道の大地を踏みしめるとなると、旅にでたという気分になる。空港から市内まで約30分程電車で向かう。車窓から見える景色は、やはり雄大で原野という言葉がここではピッタリする。

辻会長、宮本先生と先ず北大を訪れる。クラーク博士の像やポプラ並木の前で写真を撮ったり、広々としたキャンパスを歩いていると、ふと学生時代のことを思い出した。

午後には、定期観光バスで、サッポロビールや雪印の工場を見学し、ビールやアイスクリームを楽しみました。羊丘高原は、写真通りののどかな風景、すっかり会議にやってきたことなど忘れてしまいそうでした。夜には西村副会長も交えて、郷土料理をゆっくりと味わった後は、明日からの会議に備えて早く休みました。

当日は、8時から会長会議があり、今回は審議事項が多いが十分に話し合う時間をとる事が大切だと確認し合った。ビジネスセッションIでは、原ディレクターからエリア分割等重要な問題に、前向きにしかし十分審議をしてゆきたい旨のご挨拶があり、板東ガバナーからは、地区大会のお礼やビル基金達成の件、近々プロトコールのマニュアルやセンチュリアンの定義など作成される予定があることが報告された。もちろん新しいクラブが誕生したことの喜びも述べられた。地区アワードでは、我がSOMクラブ大阪Iの「奉仕資金の努力に対して」、名古屋I「年に二つの新クラブ設立と地区大会の運営に対して」に表彰が贈られた。

午後には作家高橋揆一郎氏の「北の風土と文化」と題しての講演があった。北海道の歴史と明治以降の入植後には開放的な気風が生まれた特殊な風土と文化ということなのだが、少し時間が短くて十分語り尽せず残念に思った。そして、2時からいよいよ審議に入ったところ、旭川ゾンタクラブより、原エリアディレクター不信任の緊急動議が出され、会場は何のことか見当がつかず、にわかに騒然となった。重要な件であるらしいので先にその件について審議するべきであるという意見やら、今回はエリア分割という重大な審議もあり、盛りだくさんの内容なのだから予定通り進めてほしいという意見やら。議長は、まだ慣れておられない大塚次回ディレクターに急遽変更になり、一時はどうなることかと案じたが、結局は、旭川ゾンタの方で動議を下げられ、予定の審議事項に移った。議題(1)、「会計監査についてはエリアディレクター所属以外のクラブから専門家をおいてする」の事項が事務処理規則に加えられることとなった。(2)、エリアIマニュアルの改訂については、行事の出席経費が多いことに関しての細かい取り決めの提案であったが、これは各クラブの意志に任せようということに落ちつい

た。(3)、エリアの組織運営の整備については、①ディレクター選出をバイロースに基づき選挙制にするかどうかは、反対意見もあり、継続審議することとなった。②通信ネットワーク作りは、時代の要請でもあり、将来インターネットのことも合わせて前向きに考えてゆくことに決まった。③業務マニュアルの件については、大切なことだが、一旦決めてしまうと変更も難しく、各受け持つクラブによって状況の違う場面もあるので余り細かすぎるのはどうだろうかとの意見が出た。マニュアルはこれだけは必要という簡素化したものとし、参考例としてエリアディレクターのメモをつける形とすることに決まった。(4)、エリアの災害緊急体制の確立は、異存なしで採択された。(5)、地区大会の在り方を総括する件においては、大会決算の詳細な会計報告の要求ということであったが、既に、外部の専門家の監査も受け、地区マニュアル5章地区大会大会会計に基づいて、8項目すべて遂行したと名古屋より説明があった。WHOのチェックを受ける必要があり少し遅くなったがきちんと報告されていると反論された。参加できなかった者にも、登録費を払っているのだから議事録やおみやげ等も渡すべきだとの意見も出たが、できるだけ不必要な出費はやめようと前回決めた通り行った訳であるし、又、過去において議事録を欠席者に渡す慣習はなかったので、今後どうしてもというのならその様に決めてほしいとの事で落ち着いた。(6)、エリア分割については、運営やエリアミーティングの方法、予算等分割後の姿が見えないといった意見は多かった。しかし現実に世界では、日本は特殊なケースとなっているし、国際的流れから考えても前向きに検討せざるを得ない実感は各クラブにもあった。直ぐというのは困るけれど、問題点をはっきりすれば賛成という姿勢が大半だった様に思う。結局、経験者やセンチュリアンらで検討準備会というかプロジェクトチームを作り、そこで試案を練ってもらうこととなる。8月までに各クラブに、試案、検討資料を送ってもらって、分割してゆくにはどうしたら良いのかを前向きに話し合っただけでゆくことにしようということでもめでたくお開きとなった。時間は、もちろん懇親会にまで押してしまった。従ってワークショップは、渋谷氏からの辞退もあり、すべて割愛された。しかし祝舞や中村誠二氏のアルトサクソ演奏など用意されていたのに、私達は長時間の審議にいささか疲れ、お腹もペコペコでちょっと申し訳なかった様な気がしている。しかし熱心な議論の姿を見て、皆ゾンタを愛しているんだなあー、一生懸命なのだと改めて痛感した一日だった。その後はみんなで大浴場に行き、あったかい湯にくつろぎ、北国の夜を満喫した。





私は医者になって40年余、此の地で開業して30年余になる。思いつくままに診察室の様子を書いてみたい。

開業当初は子供が大半を占めていたが、今は高齢者がすっかり多くなった。その中の一人に、昨年百才で亡くなったKさんがおられた。Kさんはご主人と死別してから、ずっと独り住まいだったが、此の方は背筋を伸ばして話し方もきはきしていた。その上、とってもおしゃれ。きれいな白髪に軽くパーマをかけて、何時も、何か一点赤い物を着ておられた。それがとっても素敵だった。待合室では皆が彼女の健康法に熱心に耳を傾けていた。90才までは毎朝逆立ちをしておられたそう。その後は毎日3キロは散歩をしており、三度の食事もある栄養のバランスを考えて作っている、との事であった。

お年寄りの患者さんの中でも特に印象に残る方だった。

Aさん。53才。女性。2週間程前から、喉に何かひっかかるので鏡で見たら舌の奥に腫れ物が出ていたとの訴え。間接喉頭鏡をファイバースコープで診るが所見なし。私は「ハハーン」と思って、絵を書いて「これでしょう」と言うと「そうです」とAさん。「心配ないですよ。これは有廓乳頭と言って誰にでもある物です」と説明すると、Aさんは始めて笑顔を見せて「本当ですか。ああ良かった。心配で眠れなかったのです」とホッとして帰られた。

ある日曜日。今日はお手間入りの料理を作ろうと、レ

シビと首引きで作っていると、チャイムが鳴って「魚の骨が喉にささりました」と急患。手を拭き拭き診察室へ。あるある、扁桃腺に太いのが突き刺さっている。鉗子で挿んで抜くと、患者さんは「アー楽になりました。有難う有難う」と大変喜んでくれた。喉の異物除去の中で最も簡単な異物除去。前の患者さんといい、簡単な事で喜んで貰えて開業医としての冥利につきる。

急患の事で他に一つ。ある日の深夜。チャイムで起こされて出て見ると、救急車が鼻出血の患者さんを搬んで来た。「お願いします」と40才位の厚化粧の女性を残して帰って行った。診察台に座らせて、先づ血餅の除去をし、止血タンポンを入れると「痛い痛い」と言ったのが何と男の声。よく見ると剥げかかった化粧の下に髭がある。オカマだった。私は腰を抜かさばかりに驚いた。鼻出血は止血するまで、観察しなければならない。私はまだ若かった。深夜の密室でオカマと二人で居るのは気持ちが悪い。早く止まります様にと念じながらタンポンを抜くと、きれいに止まっていた。早々に止血剤を投与して帰って貰い、やっと安堵した。

開業当時の子供が、今ではいいパパ、ママになって子供を連れて診察に来る。又、離れた所に嫁いでいても、わざわざ子供の診察に来てくれる人もある。こんな時、私は心から幸せを感じる。





松本ゾンタクラブのチャーターナイトに出席して

西 麗子



今年は春の訪れが遅く、4月に入っても「春は名のみ」の状態です。しかし3月下旬には白木蓮は香しく咲き、次いで桜が華やかに復活の季節を祝ってます。そんな早春の4月13日(土)、松本ゾンタクラブが世界で1522番目、国内32番目のクラブとして発足、チャーターナイトが、松本市のホテル ユェナビスタで挙行されました。全国より135名のゾンシャンがお祝いに駆け付け、大阪Ⅱよりは、辻康子、丸山優子、私の3名が認証状伝達式及び祝賀会に参列しました。松本ゾンタクラブ初代会長は内科医の畑山喜美枝先生で、創立のそもそものきっかけはあの阪神大震災でした。ボランティアで駆けつけた畑山先生が、名古屋ゾンタクラブの佐藤千代子先生との出会いの中で、ゾンタの趣旨に賛同され、松本ゾンタクラブが誕生したとの素晴らしいお話には、大いに感動しました。

認証状伝達式は6時40分頃より寺村副会長の開会宣言で始まり、型のごとく、ゾンタソング斉唱、ヘッドテーブルの紹介、国際ゾンタ会長メッセージ朗読の後、板東ガバナーより認証状が伝達されました。役員が任命され、板東ガバナー、原エリアディレクターが祝辞を述べられ、私達も新しい仲間を心から歓迎するとともに、3年前のあの感激を反芻しました。佐藤先生より設立経過報告があり、畑山会長挨拶、18名がチャーター会員紹介の後宣誓されました。1) 奉仕活動をする。2) 職業を奉仕活動の一環とする。3) 自己の研鑽につとめる。4) 自分の欲する所を他人にせよ、等でした。ご来賓祝辞は吉村長野県知事、有賀松本市長が、男女共生運動が効を奏し、女性部長が初めて誕生したこと等を述べて、ゾンタの誕生を祝いました。記念寄付は長野県立こども病院にゾンタ文庫設置(35万円)、松本市女性室に図書(100万円)、アメリカ・イアハートフェローシップファンド(1000ドル)をされました。多田副会長の閉会の言葉をもち、認証状伝達式は無事終了しま

した。

祝賀会は8時頃より鳳凰の間でとりおこなわれ、林 綾子、聡子さん姉妹がフルート演奏されました。若々しい華やかな調べです。祝辞は、栗林松本商工会議所会頭、梶山SOMクラブ会長が物が豊かな時代であるだけに、心がより重要である旨の話がされました。花岡国際ロータリーパストガバナーが乾杯の音頭をとられ、あと心尽しの美味しいお料理をいただきました。私達も、料理も試食したのに、実際食べてやっとほっとした事を思い出し感慨もひとしおです。各テーブルで話も弾みます。ゾンタの醍醐味はやはり全国のゾンシャンとの交流にあります。また新しいお友達ができ、懐かしい人達と再会を喜び合います。デザート前頃、ご来賓及び各ゾンタクラブの紹介がありました。畑山会長からお礼の言葉があり、飯島実行委員長が閉会の言葉を述べられ、祝賀会も無事終了しました。新しく仲間入りされた松本のゾンシャン方、おめでとうございます。これからはご一緒に奉仕活動に取り組んでいきましょう。どうぞよろしく願い申し上げます。



郡山チャーターナイトに参加して

久岡 眞佐代



大阪Ⅱゾンタクラブが発足して早くも4年、平成7年から役員の順番が回ってきました。できるだけ事務の合理化、簡素化をモットーに、本職の弁護士業との両立を図りたいと思っています。

役員の間は確かに多忙のようですが、役員になったお陰で、私の勉強不足、経験不足を優しく見守ってくださる会員の皆様の暖かな人柄に触れる機会に恵まれたことは、大きな収穫であったと思います。

さて、1996年4月19日、郡山ゾンタクラブの認証状伝達式・晩餐会(郡山ビューホテルアネックス)が開催され、大阪Ⅱゾンタクラブから私が出席しました。郡山までの新幹線の車中で、誰にも邪魔されず、電話のベルもなく、駅弁を食べながら読み残しのJ.アーチャー作「ケインとアベル」下巻を読み終わるといったゆったりした気分の時間を過ごしました。

認証式の当日は、あいにくの小雨降る肌寒い天候でしたが、緊張の中にも、ときどき聞こえてくる東北弁の語らいが暖かみのある雰囲気醸し出し、晩餐会では、つついびールのグラスを交わし過ぎてしまいました。

翌4月20日は、福島ゾンタクラブ認証状伝達式・晩餐会(裏磐梯猫魔ホテル)に出席し、大阪Ⅱゾンタクラブの川村さん、牛田さんと合流しました。

20日と21日の両日、智恵子の生家、磐梯ゴールドライン、会津白虎隊の墓、飯盛山、野口英世記念館、猪苗代湖などをたっぷりと見て回り、この観光には、私の71歳の母も便乗させて頂き、久しぶりに母娘水入らずの旅を楽しみました。磐梯山は、例年になく雪解けが遅く、桜の蕾の膨みはなく、五色沼に一歩も近づけなかったのは心残りでした。でも、真冬と違って少しずつ雪が



解け始めた水墨画のような冬景色と樹氷は、忘れられない思い出になりました。

私にとって、磐梯山、会津若松は、私が20歳のときに旅した場所であり、私の人生の節目になった場所です。私は、高校まで福岡で過ごし、東京に憧れて早稲田大学文学部英文学科に入学したものの、大学2年のときに学

生運動で大学閉鎖となり、「自分の将来が見えない」と悩みながら磐梯山や会津若松を歩き回りました。そして、その旅行から帰って大学を退学することを決め、翌年4月、司法試験を目指して中央大学法学部に入学し、その後、弁護士の仕事をするようになったのです。26年振りの磐梯山、会津若松の旅は、私にとっては感慨深いものでした。

## 福島ゾンタクラブ認証式

牛田 三千子



関西では桜も散りゴールデンウィークも間近という4月20日、福島ゾンタクラブ認証式が行われる郡山市に向かいました。新幹線乗り継ぎ郡山駅に降り立ったとたんその寒さに思わず身震い。当地でも何年来の寒さとかで、迎えるホテルバスから見る景色もまるでスキー場に似たような雪景色でした。その雪の草原と湖の中に突如として現れた素晴らしい「猫魔ホテル」が今日の認証式の会場です。その猫魔ホテルで一服したのち、新クラブ理事大沼様の司会により認証式が始まりました。国際会長のメッセージ朗読、認証状伝達式などが厳肅な雰囲気の中でとり行われ、新クラブ会長和田洋子様のご挨拶へと続きます。現職の参議院議員でいらっしゃる和田会長は、福島にゾンタクラブが誕生したことの喜びとゾンシャンとしての熱意を力強く話されました。5時からの祝宴では、珍しい「彼岸獅子」の踊りを鑑賞したり、おいしい郷土料理をいただいたり、旧知の方やはじめてお会いするゾンシャンとの語らい、と楽しい時はあっという間に過ぎてゆきます。最後に「今日の日はさようなら」を合唱したのち、再会を約して散会となりました。厳肅な中に和やかさがあり、アットホームな中に高い格调がある素晴らしい式典に出席できたことを心から嬉しく思いました。

翌日は8時半にホテルを出発し残雪の美しい磐梯ゴールドラインを通り、歴史の街会津へと向かいました。飯盛山でガイドさんから白虎隊のお話を聞き、維新前夜の

青年たちの熱情に思いを馳せました。また、猪苗代の生んだ野口英世博士の生家を訪れ、子供の頃読んだ伝記の写真で記憶のある「いろり」を見せていただき偉大な業績をしのびました。今まであまり訪れたことのなかった福島県ですが、磐梯山の美しさ、福島ゾンタの皆様をはじめ福島の方々の暖かいおもてなしに感激し福島がすっかり好きになりました。今度は冬にスキーに来てみたいと思いました。

福島ゾンタクラブ認証式への大阪Ⅱゾンタクラブからの参加は、川村さん、久岡さん、牛田の3人だけでしたが、皆大いに他クラブゾンシャンとの親睦を深め、帰りの福島空港ではしっかり名物喜多方ラーメンを食べて胸もいっぱい、おなかもいっぱい帰りました。



## 名古屋Ⅱチャーターナイト

久岡 眞佐代



1996年6月28日、名古屋Ⅱゾンタクラブ（世界で1531番目、日本で35番目）の認証状伝達式・晩餐会が開催され、大阪Ⅱゾンタクラブからは、辻会長、西さん、私の3人が出席しました。私は当日名古屋での仕事を済ませ、午後5時に名古屋ヒルトンホテルに駆け込みました。

認証式で、SOMクラブの名古屋Ⅰゾンタクラブから、「誕生の過程では、若い方が多く、忙しくて、一時は流産しかかった、でも、仕事以外に視野を広げて欲しい。」との激励の言葉が送られ、この言葉は、仕事とゾンタの両立に苦慮している私にとって1つの指針となりました。私は、このゾンタでの出会いのチャンスを生かし、色々なことを吸収して、人間としての視野を深めたいと思いました。

チャーターナイトでは、各地のゾンシャンの方々の年

齢を感じさせない華やかなファッションとその明るく生き生きとした人生を垣間見ることができ、楽しい一夕を過ごしました。話がどんどん盛り上がり時間がアツという間に経ってしまいました。

私にとって、旅と言えば、子連れの家族旅行と仕事からみの出張だけでしたが、家族もときにはストレスになります。今年はゾンタの行事で郡山、福島、札幌、名古屋の各地に出かける機会が増え、この家庭から離れる旅ですっきりリラックスしました。

人生80年、90年とも言われる時代に、老後の趣味が仕事と家庭だけでは寂しいなと思います。これからは、夫や子供と一歩離れた私自身の人生を見つけるために「ゾンター人旅もいいな」と思いながら、名古屋から帰ってきました。



1997年2月23日(日)ロイヤルホテル山楽の間において、第3回チャリティイベント「講演とサロンコンサートのつどい」を開催いたします。

講演は「日本初の女子留学生 大山捨松の光と陰」と題して、「鹿鳴館の貴婦人 大山捨松」の著者であり、捨松の曹孫にあたる久野明子さんにお話を伺います。彼女は1940年東京生まれ。慶応大学文学部を卒業後スタンフォード大学、ミシガン大学で学ばれ、現在日米協会専務理事として、日本人及び外国人女子留学生の奨学金支給のための活動を行って、民間レベルでの日米両国の親善交流に努めておられます。日本における女子留学生の歴史をひもといて下さるものと思います。

コンサートは、伍芳さんの中国古箏の演奏です。以下で彼女のプロフィールを少し紹介しましょう。

## 伍芳 (Wu Fang) 紹介

飯島 恵里



古箏は長方形の音箱に絹糸の弦を張り、柱で音階を調節しながら、右の指先にはめた義爪で弾く。幅10センチ、長さ160センチの琴に弦の数は21本。琴の本体にはすずかけの木を使っています。「すずかけ」とは丸い実が鈴に似ているためその名が付いたそうですが、その木をつかったこの楽器はどんな音色を出すのでしょうか。

伍芳さんは上海生まれの上海育ち。9歳の時、古箏の第一人者、上海民族楽団の王昌先生と出会い、本格的に古箏の勉強を開始されました。その後名門の国立上海音楽学校にも入学し、古箏を中心にピアノや音楽の基礎理論をみっちり学ばれました。特に専門の古箏に関しては郭雪君氏など現代中国音楽を代表する教授達から個人指導を受け、首席で卒業されています。その後一足先に京都大学に留学されていた姉、伍鳴さんを頼って来日。立命館大学に入学されました。姉の鳴さんは子供の頃から頭脳明晰で、スポーツも万能、上海では早くから存在を知られた才女で、上海で最難関のエリート校、上海外国語学院を首席で卒業され、五ヶ国語に長けたスーパーウーマンでした。

そんな姉妹を突然襲ったのが、あの阪神大震災でした。震災当日伍芳さんは友人の家に泊まっていたので無事でしたが、鳴さんは西宮の自宅で被災。たった一人のお姉様を亡くされました。鳴さんは商社に勤める傍ら、伍芳さんの良きプロデューサーでもありました。CDの自主制作、ファンクラブの設立、ドイツ演奏旅行などを自主企画。その後独立して貿易会社を設立。また伍芳さんの演奏活動のために事務所も始動する予定でした。「私がチャチャ(姐姐、上海語で姉の意味)の代わりにになりたい。」と悲しみにくれていた伍芳さんでしたが、全く無傷で手元に残った古箏が、再び演奏活動を開始させてくれました。

地震後初めてのコンサートには鳴さんをよく知っている方々も大勢来てくださいました。「姉がどこかで見

ててくれている様な気がして。その気持ちがお客さまに伝わった様な気がします。」今まではコンサートのステージの袖にはいつも鳴さんの姿がありました。それからのコンサートでは、何か今までと違う新しいものを感じると何度も演奏を聴いている方が言われます。応援して下さる方からもっとももっといい演奏を聴いてもらいたいという気持ちが伝わったのでしょうか。「私にはお琴しかありません。お琴一本でこれからも演奏活動を続けたいと思っています。」

再び精力的に活動を開始した伍芳さんはチャリティコンサート出演など多忙な毎日を送っておられます。フルートやピアノとのジョイント、古典にとどまらず、新境地を探す試みにもトライされています。世界に向けて文化発信をしたいという気持ちで…。まさに”音楽は国境を越える”という言葉通りに、古箏を通して、人々の心に触れ、中国文化を伝える伍芳さんの音楽活動に心からの声援を送りたいと思います。



## 編集後記

インターネットを使って編集作業ができる時代になった。今回はじめて原稿をFDに入力して手渡した。我広報も、やっとパソコン時代の入口に立ったというところか。でも結局は執筆者の原稿あつての広報誌の発刊。次号も皆様のご健筆を期待しています。